

巻頭写真 縄文時代早期の佐賀県佐賀市東名遺跡から出土した編組製品の復元実験

Reconstruction of baskets of the earliest Jomon period recovered at the Higashi-myo site, Saga City, Saga Prefecture

佐賀県佐賀市の東名遺跡は縄文時代早期後葉の約8000～7500年前の遺跡であり、当時の佐賀平野の南岸に位置していた。ここでは総面積1700 m²におよぶ6基の貝塚が微高地の縁で見いだされ、微高地上には集落があって、160ヵ所の集石遺構や8体分の埋葬人骨が見いだされた。道具類としては、塞ノ神式土器をはじめとして、石鏃や石斧、石皿、磨石などの石器類、竪節や皿などの木製品類、装身具や玉、刺突具などの骨角製品類、貝輪や貝玉などの貝製品類など様々な道具類が出土しているが、なかでもこの遺跡で特徴的であったのは、約150基の土坑（貯蔵穴）を中心に出土した700点以上の編組製品であった（写真1）。約130点の編組製品の素材を調べたところ、ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. が3分の2を占め、残りはイヌビワ *Ficus erecta* Thunb. とツヅラフジ *Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wils., テイカカズラ属 *Trachelospermum* であった。このうちムクロジとイヌビワは、木材を柾目に割ったあとに板目に裂いたへぎ材が使われており、当時の石器による加工技術の高さを示すものであった。



写真2 実測図と対照して、へぎ材を組み上げる本間一恵氏（手前）と高宮紀子氏（奥）。



写真1 貯蔵穴（SK2138）に上下に重なって出土した2個体の編組製品。

当時の編組製品の製作技術を解明する第一歩として、縄文時代の人々が使っていた素材をあつめて、へぎ材を作製し組み上げるということを行った。2010年12月に大分県日田市と宮崎県小林市で素材となるムクロジとイヌビワ、ツヅラフジ、テイカカズラを蒐集した。石器を用いたへぎ材作りは我々には不可能であったので、ムクロジとイヌビワのへぎ材製作は、昨年、秋田県仙北市角館町の伝統工芸イタヤ細工師である佐藤定雄、佐藤智香、本庄あずさの各氏に依頼して、現在の道具を用いてイタヤ細工の素材にならって作製した。へぎ材の組み上げは、2011年末に佐賀市文化財資料館において、バスケットリー作家の高宮紀子、本間一恵の両氏に依頼した（写真2）。

編組製品の組み上げにあたっては、高宮氏にムクロジ製

の編組製品 (SK2138 編物②) を、本間氏にイヌビワ製の編組製品 (SK2160 編物②) の復元をお願いし、帯部と耳部、口縁巻き付け材にはツヅラフジを用いた。復元に際しては、実測図と保存処理された実物を対照しながら、各部の大きさを計測して、可能な限り忠実に復元した。その結果、ムクロジの編組製品はへぎ材 204 本を用いて全高 84 cm、体部最大径 40 cm、口縁部外径 16 cm となり、イヌビワの編組製品はへぎ材 157 本を用いて全高 77 cm、体部最大径 34 cm、口縁部外径 14 cm となり、出土遺物の見た目よりはかなり細身となった (写真 3)。ただし、実際の使用本数は、へぎ材を必要に応じて裂いたり 2 分割して使用したため、これよりも多くなる。両者のうち、イヌビワ製の編組製品の編組技法は体下部が網代編み、帯部から上部はごぎ目編みとなり、底部から立ち上げる際にもそれほどの困難は無かったが、ムクロジ製の編組製品は体下部が網代の方向が波形に変化する波形網代編みであったため、タテ材の本数をつねに 4 の倍数に揃えておかなくてはなら



写真3 イヌビワの編組製品 (SK2160 編物②) の保存処理されたもの (左) と復元したもの (右)。



写真4 ムクロジの編組製品 (SK2138 編物②) (左) とイヌビワ (SK2160 編物②) (右) の復元品。

ず、手間を要した (写真 4)。しかしこの経験によって、当時の人々もかなり数の知識を有していたことを改めて認識させられることとなった。

その後、佐賀市文化財資料館周辺で蒐集したアラカシとシラカシのドングリをイヌビワ製の編組製品に実際に詰めてみたところ、最下の帯部まででドングリ 13,000 個 (26 l) が入り、耳部の下部まででドングリ 17,500 個 (35 l) が入ることが確認できた。重量は、最下の帯部まで入れると 19.5 kg に、耳部の下部まで入れると 26.5 kg となり、水中に貯蔵した後には編組製品の引き上げは相当困難であったと想定された。

なお、素材の蒐集と組み上げにあたっては、神川建彦、齊藤政美、千葉敏朗、本田秀生、熊代昌之、今田秀樹、真邊彩の各氏にご協力いただいた。ここに御礼申しあげる。またこの復元実験は部分的に科学研究費補助金 (基盤研究 (A) No. 21240071) の補助を受けた。

(鈴木三男・西田 巖・佐々木由香・能城修一・小林和貴 Mitsuo Suzuki, Iwao Nishida, Yuka Sasaki, Shuichi Noshiro and Kazutaka Kobayashi)